

虚の符

洪水企画 2015.9.10

13

イカダ

http://www.kozui.net

先住者 岩崎美弥子

うらの畑のアスパラガスは
箒のよりにずいぶんと伸びて
黄色く縮れた南瓜の花も咲いた
「すべて世ほこともなく」
そう散歩から帰って言うよ
「うっかりさわった茄子の棘」
先住者は呟いて笑うのだった
「なんのこと？」
自分が尋ねると、先住者はこう答えた
「茄子は、つるつるとして丸くて穏やかだらう
棘なんてあるはずないんだよ、でもね！」
「ええっ？」
「あるんだよ、すごい棘が」
「うーむ」
「痛い！て、びびくりしてしまふよ。茄子には」
「ミステリーだね」

自分は多くのことをこの先住者から教わった
(まだ小さいに寂しくないかしら)
なると心配もされたが、そんなことはなかった
自分が先住者に気がついたのは、いつだったか
ある夜、部屋の際に黒い大きな鼻が浮かんでいた
よく見ると、ぼんやりとしたふたつの目と口があった
それに加えて白と茶の斑もあると判ったとき
おもわず「そこにいるのは誰？」と叫んだ
すると丸くて黒い鼻がちらに近づいてきた
それが先住者のBだった
Bは礼儀正しくこう言った
「自分はのあたりに住まいます
Bと呼ばれていたような気がする者だが
もうずいぶん前のことなので忘れてしまつた」

以来、自分とB（もしくはBO）は友だちになった
Bが言うには、Bの居た頃には
白くて小さいMAAという先住者がいて

フレーメン 平井達也

馬が笑う滑稽画を見ることがある。しか馬は笑っているのではない。あれはフレーメンというヤコブソン器官を露出することによって空気中のフェロモン物質を嗅ぎとる行動である。牡馬は発情した牝馬に対してすまにフレーメンする。
私は何かか笑いたがる。さらには同類を笑わせたがりもする。牡馬をフレーメンさせたる牝馬のようにとも言えるだろうか。ただ笑わせる詩を書くことは泣かせる詩を書くことよりはるかに難しい。だから詩人は言い訳みたいに懊悩する。
私は懊悩しない。私はフレーメンしたい。ヤコブソン器官を失った代わりに得たものから逃れた。とはいえ私たちは滑稽画や詩にあまりに多くを依存している。フレーメンへの憧れそのものが詩的な事態に終わらざるを得ない。



【新型コロナウイルスの電子顕微鏡写真が放映されるたび……】

たなかあきみつ

新型コロナウイルスの電子顕微鏡写真が放映されるたび
テレビ画面に大写しになる、病勢と関係なく
サンプル写真だからいつも同じ図柄だ
ウニの殻のような緑黄橙のリングも紫水晶の劈開とは異なっていて
いつも円のどこかへこんで歪んで正円を描かない
たとえば夜行の都市間バスが定時に発車した直後
夏冬のターミナルにはきつい排ガス臭が残った、巷間
《乗合バス》というフレイズを耳にしくなつて久しいその秘文字
はセピア色の柿の木の絵葉書にインクの染みのように滲んでいる
なぜか昼間の湿気になじむ（humidity）の臭いがこれに攪拌される
遠隔操作の破片のように心もとないどろっとした感じのピロッド地
ヨコ位置のズッキーニが隆々と仕掛ける
暗緑と暗黄のメデアミックスになる、耳ならキヌク骨を
耐風マツチかそれともマンホールの蓋は波動の楯に被さるか。
ジャン・デュビュッフェ展のカタログにて半世紀以上前の
地肌学シリーズの作品群、地肌学というネオロジスムに出会つた
織物の織り目よりもずっとマクラメな土壌や地層が眼に痛かつた。
遠隔操作されぬ頭なさがときにはブリキの空つぽの水槽や
マザーグースの遠雷の耳目に連座する

同じ凶柄のサンプル写真でも脳裡で移動できる
つるんとした感染のマケットよ達が雲丹紫にむかつて針状化する
ざらざらしてその針先で色彩のクレーヴァスを測量する
ルゴジテという語自体でつるもなざらざらにして
店頭にはリゾームの内出血なり瘻のなり鴨のバテが出される
地中海を鋭意航行中の、オッカムの剃刀の段だら地肌
俯瞰魚の黒地に原色とりどりの鱗だった、かの大佐亡き後の
鈴なりの難民船の地肌よつると図版の海鼠はむ時制よ
俯瞰すると見事に空撮の魚拓を呈する難民船
海彼の波を旋回するローター音のヒレがなんども掻き上げる。
夜来の湿砂をのせた箱車、COCOAのプランコのように
猫まで声の地割れとパラソをとりつつ、
かつて表面張力だったところ海底の油井だったところに
ましてや往年のパークの《油井の弁》みたいなところに待望の
ブルーノ・シュルツ切手の斜視だったところに何が潜んでいるか

柑橘類にぶしゅぶしゅ巻きつく未生の導火線
現下の雨天を期してすかさずばんだ蝶類の蝶番
水しぶきのエクラの脚や騎やこれぞ standard B の線影
聳え立つライム鉱山のよぞとん底に停車した過積載のトラック
戦時であれ無風のすてに微塵の陶片をあさる濃霧のゴッフル
【補註】《光の手首》 詩人ルネ・シャルの一九三九年一月二十四日
付ヒナツ短書簡から引用（ルネ・シャル『詩人のアトリエ
にて』一九九六年ガリマール刊・収録）

浅瀬で無事に救出され、なぜか笑われた
それ以来、不本意ながらも慎重深く
岸辺のごく浅いところで水と戯れていたが
なにか面白みにかけているような気がしていた
そんなある日、ちよつと離れた場所
知らない少年がなにかを試みようとしているのが見えた
近づいてみると、少年はあるものを装備して
じいっと、川の流れを見つめていた
その姿はまるで首の細い鳥のようだった

最初はお古の竹竿が一本だけ
そのうち一本増え、また一本と増えていくうちに
少年も自分も大きくなつて来た
冬のあいだは川へは行かなかった
春が過ぎ梅雨になると解禁日が待ち遠しくて
自分はいつも急ぎ足で歩いた
少年とは特別語り合うこともなかったが
釣りをしているところに行つて
ちらりと挨拶をしてから
魚籠のなかの魚を覗くこと
それだけで心が満ちた
これは絶対わざと構って貰いたいのではなく
本当に偶然なのだが
岸に並べた釣竿のあいだを上手に歩けず
釣り糸に足を引っ掛けてしまったのを
(ああ、こちら)

「Mは知らないだろ、魚のことは」
「Mは知っていた。でも関心がないんだ」
「それで次の日も行ったの？」
「行つたさ」
「そうだね」
「でも挨拶をしなかったかも知れない」
「そうなの？」
「魚籠を覗くのも忘れたかも知れない」
「……」

Bの話を聞きながら、自分は眠ってしまったのか
Bのうびょうと木枯しが鳴っていた
吹雪の子供が上空で渦を巻いているらしい
かすかにBの音が続いていた
Bはこう言っているようだった
「夏になったら東の川原に行つて
少年に挨拶をしきれぬから」
速くの叢ではBの白い尾がちらちらと見え隠れしている
眼りのうちに自分はこう答えた

「謎なるもの茄子の棘」

猫脚 海基今日子

たとえばほろびとやくそく。かたわらで、ねがうように、
みちびくように、やすみながら、せつついている。かた
まりとしての、こえに、にたものが、いつからか、おそ
らく、なにかのさかいかいめ、じしんのはざまに、みちびか
れるように、そんざい、きつと、はじめたのだから。

しらない、たいせつな、ねこのよう。きばを、どこかで、
ひつかき、こわした、さきが、たいはいです。くちでゆ
く、ものなら、いきながら、うしなわれるから。たとえ
ば、そんなふうには、すわつたこんせきをつむぐように、
はき、じゅうまんし、しずかに、もどつてくるの、かも。
いすは、こぎよきを、すわりましたよ。なじみませんが、
それは、きよぜつし、だからこそ、しよくぶつのように。
くいろいろに、かれを、はつて、のがれるのだから。
いいたくないことが、ゆるんでいる。ふるいけむりは、
いいませんか。かなしい、へやが、ほほえむようです。

ちかに、さしこむ、むざし。うそのはなの、あたらしい、
ぬくもり。きりがなかった、よこしまな、うるわしい、
あいじよう。ひみつめいた、たいはいの、したしげな、
まるで、きめら。かれらは、なんて、そこに、であつた
のだから。おそれていたなら、ぞんが、い、やさしい。
では、その、かたわらに、いきたかつたのだからか。ふ
るざとをもたない、かれのそれは、かどつた、いわば
そんなふうには、ねこのあし、つめをとく。きすが、ずい
ぶん、ぬくもつていたつけ。こわれるものが、はさまを、
だきしめ、かくとして、かくせりする、してね。

つれなきを、こめて、とおい、ねこだ。いすでした、か
れない、はなの、くつきりと、かれらが、いこく、と、
かなでるおとが、どんな、ちまたに、やどるのでしょうか。
ゆうやみに、よりそののなら、たとえは、ししやの、か
ぞくしやしん、あかるいへやの、まつたきくらがり。
ほろびと、くつろぎ、かれを、ときした、いすは、すえ
たにおいて、こたえのようです。どこかの、きれつ、か
つての、けはいが、おすれるものを、それでも、いと
しみ、おのいた、いつしか、かれるように、みえない、
そちらだ。あんがい、こちらで、とびのる、ねこへ。

蟬たちに 神泉 薫

すみれ色の陽が
火照つたアスファルトを覆う 夏の終わりに
乾いた腹を空に向けて
一匹の蟬が
転がる
そつと羽に触れれば
たちまち激しく飛び立ち
ああ 存在はまだ 失われていない
ふいによぎった胸の痛みを 振りほどいてゆく
澄んだ青空と
極まる太陽の明るさに身をさらした
ひとつの季節を駆け抜ける
羽に宿る柔らかな力
大地に眠る夥しい死者たちが 底から支えるてのひらの温みを
一心に受け取つて
残された飛翔を 遂行する
そう あれば わたくしたちの 飛行
宇宙に遍在するわずかな時を
軽やかな妻むら帽子を被つて 駆け抜けるのだ
誰かの名を呼び
誰かの肩に触れ
誰かと夏を分かち合う
生ある羽に確かに刻めば
指折り数える喜びを 生ある羽に確かに刻めば
天空へと立ち上る花火の煙
きらびやかな星屑は永久に瞬き
燃える日々の名残が 今ここに わずかに香る



étude 四肆舞 55/59 池田 康

（55）
かわらけに酒
飲み干せば 雨
飲み干せば かわらけを洗い
地に吸い込まれて消える

初心に還り動かす
という素朴な感情
なにも作っていないのと同じ
草の雫の無為
神の創造と俗に謂われる
この天地 この光彩陸離のなかで
なにを作ろうと所詮
かわらけ
かわらけに酒
飲み干せば 星
満天の 俗に神と謂われる創造の
光彩の陸離のかわらけ

（59）
切符を与えず
改札を開かず
ホームを教えす
旅人を引き留める

この駅はどこから来てどこへ行くのか
時刻表もレールも告げない
駅名はなんなのか
ここは名乗らない
駅長をどこかで見たという噂もあるが
人間か犬かコオロギか幽霊か
どんな駅笑顔でどんな駅会釈をするのか
車掌も知らない
旅人は駅の中で迷うばかり
構内をめぐりめぐる旅
それを旅だと思いつく旅人は
駅は監禁する